

〈三〉

畑下 嘉之  
畑下 圭子

福祉滋賀のレガシー  
実践の軌跡とフィロソフィー

24

福祉滋賀のレガシー

実践の軌跡とフィロソフィー

〈三〉 畑下 嘉之・畑下 圭子

2023(令和5)年3月31日発行

発行所 社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会  
滋賀県草津市笠山7-8-138 TEL077-567-3920  
<https://www.shigashakyo.jp/>

発行人 渡邊 光春

取材・編集 小坂綾子

装画 atelier minori

デザイン (株)タケコマイ

社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会 70周年記念事業

## 畑下嘉之・畑下圭子と青祥会の歩み

特別養護老人ホームが各地域に建ち、自立に向けての支援もあり、認知症の人やその家族も安心して暮らせる――。

湖北地域をぐるりと見渡すと、高齢者福祉のセーフティネットが構築され、畑下嘉之さんと畑下圭子さんが種を蒔いて育ててきた福祉の形がある。

今や、認知症患者や高齢者が福祉施設で生活するスタイルは、高齢者福祉の一つの形として定着している。だが、都会から離れた地域での福祉のセーフティネットづくりは、困難からのスタートだった。

精神科医である嘉之さんと圭子さんが湖北地域に特別養護老人ホームの建設を考え始めたのは、昭和50年代に入った頃だ。

湖北地域における高齢者福祉をリードしてきた社会福祉法人青祥会。理事長の畑下嘉之さんと総施設長の畑下圭子さんは、人が人らしく生きられる環境づくりを目指して、様々な挑戦を重ねてきた。その試みは多難であったが、同時に、時代を先取りして切り拓いていく希望でもあった。



畑下 嘉之（写真右） 社会福祉法人 青祥会 理事長 / 医師

32歳のとき精神病院、現・セフィロト病院院長に就任。  
1982年社会福祉法人青祥会設立以降、  
理事長として、地域共生社会づくりをめざし  
医療、介護、福祉の一体的サービスの提供を進めている。

畑下 圭子（写真左） 社会福祉法人 青祥会 総施設長 / 医師

精神科医として従事する中、  
1982年特別養護老人ホーム青浄苑の開設とともに初代施設長に就任。  
以降も、地域において幅広い事業推進に取り組んでいる。

現在、セフィロト病院、特別養護老人ホーム（青浄苑、アンタレス、坂田青成苑、青芳、やまびこ）、介護老人保健施設（長浜メディケアセンター、坂田メディケアセンター）をはじめとして、滋賀県湖北地域において、高齢者福祉事業を中心とした運営に取り組んでいる。

ケアハウス2か所  
通所リハビリテーション2か所  
訪問看護ステーション1か所  
居宅介護支援事業所5か所  
グループホーム2か所

通所介護施設7か所  
ホームヘルプステーション1か所  
訪問リハビリテーション1か所  
地域包括支援センター1か所

「その頃は、全くニーズが見えなかった。田舎だったこともあり、高齢者は家族が面倒をみるのが普通だったんですね。介護はそれほど課題にはなっていないかった」。嘉之さんは、当時を振り返る。

けれど、2人は入所施設の必要性を確信していた。経営する精神科病院での変化を見てきたからだ。そこには、患者の高齢化が進み、認知症患者が増え始めているという現象があった。

「認知症の人は、これからもっと増える。いずれ、施設で暮らせる環境が必要になる」  
この気づきから、2人の挑戦が始まっていくことになる。

## 福祉の実践は、精神科病院から始まった

嘉之さんが湖北地域の精神障害者と高齢者の福祉に携わるようになった原点は、圭子さんの父である青木潔先生が1958（昭和33）年に開院した八幡精神病院長浜分院（現・セフィロト病院）の院長職を継いだことにある。32歳の若さだった。

医療の世界に入ろうと考えた当初は、脳外科や整形外科を志していた嘉之さん。だが、圭子さんとの結婚を機に、精神科の病院を任されることになる。

「日本の精神科医療は、特殊な道のりを歩んできた。いろいろな症状が出て社会生活がうまくいかない方が多く、身体疾患とは違っていた」

差別と偏見に苦しめられてきた精神科の患者たち。家族の中にいることは恥だとされ、格子などで囲った座敷牢に監禁するような時代も長くあった。その時代の患者をずっと支えてきた病院を継ぐこととなった嘉之さんは、保健所の担当者と家庭訪問して医療に繋ぐように努め、全力で精神科医療と患者に向き合った。

「精神障害者の中には、幻覚や妄想などの急激な症状や、自分を傷つけたり他害があったりする患者もいる。入院して、薬で抑えられても、二度と症状が出ないとは限らない。ご家族は、治ってしまうまでは預かってほしいと言われることもあり、40〜50年という長期間入院されている方もあった」

そんな状況から、精神障害者は本来は福祉の対象だ、ということ当初から考えていた。

高齢者福祉施設の運営も、視野に入っていた。だが、その必要性について地域から認識され、法人が信頼されるようになるまでには、相当な時間がかかった。

## 精神科医療から福祉の世界へ

福祉の世界に入っていくにあたり、当初、2人が構想していたのは、精神障害者が在宅へ戻るための、病院と在宅の中間施設。だが、それよりも先に必要とされたのは、高齢者の施設だった。

精神科病院で患者の高齢化が進み、認知症の患者が増加。症状が安定しても、入院期間が長期化し、自宅への受け入れや地域での生活も困難な状況が顕著になっていた。

同時期、嘉之さんが病院長を務め、精神科医療を牽引してきた現・社会福祉法人青祥会セフィロト病院は、福祉分野への挑戦をしようと考えていた。

国では高齢者の介護問題を取りあげ、「社会福祉法人が運営する専門の施設が必要ではないか」という声が上がりはじめていた。

高齢者福祉のニーズが高まっている現状から、嘉之さん、圭子さんは精神障害者を含めた高齢者を広く受け入れる施設として、湖北地域に特別養護老人ホームを建設することを決意。1982（昭和57）年に社会福祉法人の認可を受け、福祉分野への第一歩を踏み出した。

だが、ことはそう簡単には動かなかった。

社会福祉法人青祥会の法人認可を受けたが、長浜ではニーズが顕在化していない。とはいえ、認知症の人は増えている。いずれ必要になるのはわかっているのに、住民の理解がなかなか得られない。

嘉之さんは、昼夜を問わず湖北地域一帯を説明に走り回った。

「長浜市内を探したけれど、なかなかいい場所がない。丁度空いてる場所があっても、地元も喜んで受け入れてくれない。その上、行政も消極的であった。何度かお願いにあがって、なんとか認めていただいた」当時、高齢者の人たちが入る施設がつくられることには、地域として大きな不安があったのだ。

## 医師として、福祉の現場へ

社会福祉法人青祥会の最初の特別養護老人ホーム「青浄苑」の初代施設長を任されたのは、圭子さんだった。特別養護老人ホームは利用者にとっては家であり生活の場。病院とは異なる現実を思い知らされ、戸惑いながらのスタートとなった。

「医療分野と福祉分野は、組織の体制や仕事の内容が違う。そのころはまだまだ、医療と福祉の連携は乏しく、自分に何ができるのかわからず、時には涙する日もあった」と圭子さんは振り返る。

医師が福祉施設の施設長になる。そのようなケースはほとんどなく、中でも精神科医は、全国でも例がなかった。

「当時、私が福祉施設に行くと言うと、『なぜ』よほどできない医者なのか」という目線を向けられた。けれど、父の精神科医療をそばで見てきた私としては、ずっと昔から、医療と福祉が合体しているものという感覚でした」

1年間にわたって施設長養成の研修を受けたが、現場は思うようにいかず、職員たちに教えられながら毎日が過ぎていった。

「それでも、高齢者の施設で仕事をさせてもらっている方が、水を得た魚のような自分だった」

当時は、県・市町村主催の措置対策会議が開かれて入所者が決定される措置時代。「認知症高齢者を医療が受け入れるのか、特別養護老人ホームが受け入れるのかと議論されました。認知症や精神障害の人たちの受け入れを拒む施設が多く存在していました」。その中で青浄苑は、どんな人も受け入れていった。

## 「地域に来てほしい」施設に

1982（昭和57）年の青浄苑開設から7、8年が過ぎると、青祥会を見る地域の目が変わってきた。

「旧坂田郡から、『自分の地域にも老人ホームを作りたい』と申し出があったのです。当時の山東町長の話では、滋賀県庁に『老人ホームを作りたい』と相談に行ったら、紹介されたのが青祥会だったということでした。嬉しかったですね。嘉之さんにとって、忘れられない出来事だった。」

また、青浄苑開設10年後の1992（平成4）年、特別養護老人ホーム坂田青成苑を開設。その年に結婚されて最初の訪問として、今上天皇陛下皇后陛下に訪問していただいた事も生涯忘れることはできない。6年後の1998（平成10）年には、旧東浅井郡びわ町長から同様の相談があり、小学校跡地に開設。さらに旧愛知郡秦荘町長からも申し出があった。

「各自治体から、『なんとしても作ってもらいたい』と言ってもらったこと、それは、高齢化社会の課題解決のため仕事をする一人の人間として信頼していただいたことは、忘れることのできない今なお脳裏に残る、一番の宝」

嘉之さんにとって、社会からの求めに応えていけたことは、自分なりの福祉をやり通す原動力になっている。

特別養護老人ホームは、1982（昭和57）年に青浄苑開設後、湖北地域の各地に相次いで開設され、この間に、地域の受け止め方は大きく変化した。「来てほしくない施設」だったのが、「来てほしい施設」になっ



たのだ。

「今でいう認知症の人が入所すると、うつる」そういう人が来るとイメージダウンとなり土地の値段が下がる」「認めてあげたいけれど認められない」など、当初は地域住民たちからは様々な声が上がっていたが、そんな中でも、嘉之さんは会う人会う人に声をかけ、繋がりを少しずつ築いていった。

その、人と人との繋がりの積み重ねが、今の青祥会をつくっている。

## 自立へと向かえる施設を

高齢化が進む中、次に課題となってきたのは、「どうすれば利用者が寝たきりにならず、自分で生きようとする力を保持できるか」ということだった。

国が進めていたのが、病院と自宅の中間施設としてリハビリに力を入れる老人保健施設。滋賀県の整備率は東京都に次ぐ全国で2番目に低く、建設が促されていた。

老人保健施設の運営は、まさに2人がずっと取り組みたいと考えていた事業だった。そして1993（平成5）年9月、青祥会は念願の老人保健施設「長浜メデイケアセンター」104床を滋賀県、長浜市から東京都と同額の補助金を受けオープンさせた。

それは、高齢者が地域で生きていくことを支える施設をつくるという、新しい挑戦だった。

長浜メデイケアセンター104床に続いて1999（平成11）年、坂田メデイケアセンターは、80床でオープンし、圭子さんが施設長になった。

その頃の日本は高齢化が進み、認知症の人が増え、また新たな課題が生まれていた。老人保健施設も特別養護老人ホームも、身体がうまく動かない高齢者のケアが中心で認知症の人にとっては、生活しにくい空間だったのだ。

「これから認知症が増えていくだろうから、認知症の専門棟が必要ではないか」。そう考え、坂田メデイケアセンターの認知症専門棟増床への思いを募らせるようになった2人だが、すぐには、思い描いた展開にならなかった。滋賀県庁に書類を提出、国へ相談してもらったが、要望はなかなか通らなかった。

圭子さんは県庁を訪れ、必要性を訴えた。『補助金もないし絶対に認められない』と繰り返す担当者も、大声で言い合いました。また若くて、56歳の時です。横から『やめよ、やめよ』と嘉之理事長に言われてもやめなかった。私たちの要望を知った上司の方が『すぐにできないと決めつけず国へ相談しよう』と言ってくれた。その一言は、今も忘れられない。

## 健康長寿を支える

住民の今のニーズに応えるだけでなく、時代の先を見越した長期的な視野をもって、青祥会は歩んできた。特別養護老人ホーム青浄苑を開設した措置時代から、介護保険ができ、契約の時代に。福祉の制度の大きな変わり目も経験した。

現在は、9つの高齢者の施設（老人保健施設2つ、特別養護老人ホーム5つ、ケアハウス2つ）と病院を運営し、湖北地域での高齢者の医療・福祉の大きな受け皿をつくっている。

この先、2人が重要だと考えているのは、介護の予防だ。

「健康長寿の夢を描いています。要介護になる前に、病気を防ぐ、認知症を防ぐサポートをしたい。50代、60代から、自分の生き方を描いて、実現するにはどうすればいいか考えられるような環境をつくりたい」。嘉之さんは、そう考える。

青祥会開設40周年を迎え、健康長寿社会に向けて構想している次のビジョンがある。それは、「和田（わんだ）の森※」に新たな施設を建設し、様々な介護予防サービスの提供を基盤とする地域コミュニティの場をつくること。人生100年時代に向けたもう一つの種を、少しずつ、時き始めている。

※「和田の森」とは、青祥会の最新の施設である特別養護老人ホームアンタレス（全室個室・10人のユニット型／免震設備）の西側の広大な土地のこと。

## 2人が大事にしてきたこと

湖北地域で高齢者福祉を手広く展開する青祥会。その出発点は、畑下嘉之さん、畑下圭子さんと精神科の患者との出会いである。

圭子さんは、精神科医だった父・青木潔先生に育てられ、精神科の患者のそばで日々を過ごした。一方の嘉之さんは漁師町で太平洋と向き合って生まれ育ったが、圭子さんとの結婚が転機となり、精神科医療に携わることとなった。

2人を結んでいるのは、共通点となっている「人への思い」だ。

## 精神科の患者を見ながら大人に

圭子さんの原点は、精神障害のある人たちと同じ敷地に暮らしていた子どもの頃の記憶である。ものごころがついたときは、常に精神科の患者が近くにいる環境だった。

当時の精神障害者は、「人としての生活」が与えられていない状況だった。障害者が家族にいることは恥だと考えられ、家庭内で閉じ込めるような座敷牢での私宅監置などが行われていた。

そんな現状を憂い、圭子さんの父・青木潔先生が1952（昭和27）年、八幡精神病院（現・公益財団法人青樹会滋賀八幡病院）を開院。1958（昭和33）年、八幡精神病院長浜分院（現・社会福祉法人青祥会セフィロト病院）を開院し、福祉的支援を考慮した病院経営がされるようになった。

「当時の病院は、大きな畳の部屋で、窓には鉄格子が設置され閉鎖された入院環境だった。治療薬も少なく、長期の入院を強いられた状況であつたが、興奮する患者さんには、電気ショック療法という現場を目にしました」

そのような状況の中で、青木潔先生は、「少しでも人間らしい生活を」と、患者の職歴や生活史に耳を傾けた。

建設現場の経験者だった患者に、ものづくりの仕事を依頼したり、中庭に池を作って金魚や鯉の世話任せたり。様々な試みをしていたが、まだ子どもだった圭子さんには理解できないことも多かった。

「中学生のとき、患者さんに鶏小屋を作ってもらったら完成品が傾いていて、『本職に作ってもらったらええのに』と、思っていました。その頃は、父がなぜそのようなことをするのか理由がわからなかったけれどそれは、患者のことを考えた、福祉的な観点での対応だったのだと、あとになって理解できた。」



「人」として接することが、精神科の治療の一環であり、精神科医療に福祉的観点を取り入れていたと知って尊敬の念がわいたのは、精神科医になってからのことだ。

圭子さんの「いま」をつくっている大きな出来事がある。

「八幡精神病院の近くの安土山に、父は、患者さんを連れ出していたのです。そんな父に、地域の人は『恐ろしい』そんな人をなんで連れて』と噂しました」

当時、幼かった圭子さんが会話の中で何気なく使った言葉に対して、青木潔先生は叱りつけた。それは、「キチガイ」という言葉だった。

「『キチガイ』という言葉はないんや、と。そういう言葉に対して心を痛めてたんでしょう」  
この出来事は、ずっと圭子さんの心に突き刺さっている。

人を傷つけるような言葉には、絶対に厳しく対応する――。いつしかそれが、圭子さんの心に決めた一つの方針になっていた。

施設の職員や利用者に対して、その精神は忘れなかった。「一旦受けた痛みの矢は、抜けません。言われた方は返すことができず、突き刺さったまま。言った方は知らないでしょうけど。利用者さんにいくらついて、心病んだり、自殺したりする人もあるのです」

## 「人らしい」暮らしへの挑戦

精神障害の患者に「人らしい人生を」と接してきた圭子さんの父・青木潔先生。その精神と実践を受け継いでいるのが、嘉之さんだ。

嘉之さんが考えていたのは、「どうすれば在宅に復帰してもらえるのか」ということ。そして、「退院できないにしても、在宅と同じような形にできないか」ということだった。

患者と共にさまざまな挑戦をした。夏は琵琶湖で一緒に泳いだり、運動会、クリスマス演奏会、八幡青樹会病院に入院中の患者さんと合同で希望ヶ丘でキャンプをしたり。旅行や花見にも一緒に行った。人との交流ができるよう、健康な人と同じような経験ができるよう、これらの模索を続けてきた。

精神障害のある人にも「人らしく」生活してもらいたい――。そのために考えてきたサービスやコミュニケーションのあり方は、福祉の精神そのもの。精神障害のある人は福祉の対象であると、嘉之さんは早くから気がついていた。

だが、医療と福祉の融合は簡単ではなく、精神障害や認知症への社会の理解も、一朝一夕には広がらない。時間も労力もかかったが、多難な中でも、嘉之さんは決して諦めなかった。

圭子さんと職員たちとともに様々な挑戦を重ね、飾らず、自然体で常に前を向いて歩む嘉之さん。その礎は、意外なことに、生まれ育った和歌山県那智勝浦の漁師町の網元の家にある。

「漁師町では、船頭と船員が一つのチームになり、漁に出ていきます。獲れる時は獲れる。けれど、天気が悪いとどうしようもない」。嘉之さんは、漁師たちのそんな姿を見て育った。

「みんなでいろんなことに挑戦して、ダメな時は仕方ないと考えるようになった。思ったことはやってみる。やってみてうまくいかなかったも失敗ではない、修正してやればいい、という姿勢でいます。漁師町で育った人間ですから」

また、「嘉之理事長は、患者のことをよく診ている」と圭子さんは言う。今も外来患者を診察している。「ゆっくり時間をかけ、丁寧に診る。30分以上、1時間、2時間かけるときもあります。私が5人診ている時間で1人を診るペース。本当によく、話を聴く医者です」

患者が病院からいなくなったときには、「家に帰りたい人やから、駅にいはるやろ」と、朝早くから駅に行って待つ。「この人は琵琶湖へ行くから危険」と判断すると、職員を琵琶湖で待たせることも。患者の一人ひとりの生活史をよく知って、診察に入るのだ。

### 「継続していく」ために必要なもの

青祥会は設立から40年を迎える。この間に福祉は措置の時代から、契約の時代へと変化し、IT化や超高齢化、担い手不足と、課題は山積みになっている。

この状況下で、嘉之さん、圭子さんが次代の福祉を見据えて重視しているのは、ケアの質と経営の問題だ。「福祉なのに『経営』というと、おかしいと思われるかもしれない。けれど、重要なのは『継続していく』ということ」と嘉之さんが大事に思っているのは、喜ばれる施設としてあり続けるための経営である。

「施設をよくし、職員さんにも喜んでもらうためには、経営が成り立たないといけない。いつも言うのは、利用していただける、選んでもらえる施設になろうよ、ということ」

圭子さんは、「科学的なケア」の必要性を実感している。

「人としての情的な対応、心に沿って支えるケアは絶対に基本ですが、支える人自体が少なくなっている。その中でケアをしようと思うと、科学的な視点が欠かせない。理論を基本にしていけないと、今

までのような情的なケアでは制度についていけないのではないか」

「情」で何もかも「してあげる」というサービスに、疑問を唱える圭子さん。

「これからは人口が減少し、働く人が減り、ますます高齢者が増えていきます。『一生懸命やっている』ということだけで介護が成り立つ時代ではなくなってくる。科学の力によることは欠かせない」

嘉之さん・圭子さんは、ITやロボットなどを使った医療や福祉のサービス、「科学的な介護」にも前向きだ。本人や家族の意向も踏まえながら、最先端の技術を取り入れた効率化を視野に入れる。

「人権の尊重はサービスの基本。そこを踏まえた上で、あらゆることを数的に評価して記録に残していく。次世代に残していくためにも、評価基準を決めて記録し、分析する。そういう考え方も大事ではないでしょうか。もちろん、忘れてはいけないのは、そこには人の心は絶対に必要だということです」

### 「和顔愛語」の精神で

「次世代が、青祥会と施設をどのように成長させるか、考えてくれるのが楽しみ」。嘉之さん、圭子さんは、地域のニーズは何か、それを実行するために何が必要なのか、学んでくれることを願っている。

「アンテナを高く張り、湖北地域での青祥会の在り方を追究し、私たちが蒔いた種を、さらに大きく育てていってほしいのです」

2人の根底には、青祥会が基本理念として掲げる「和顔愛語」の精神がある。「にこやかな顔、やさしい言葉で人に接すること。いただく喜びよりも与える喜びを知る人ほど幸福な人はいない」という意味が込められた仏教用語だ。

青浄苑の開設当初は31人だった職員数が、今や900人を超える大家族となった青祥会。職員が増えることにより、ケアの質が保てなくなり、自分たちの迷惑とは違ってきた。そこで、皆が心を一つにするために方針を出そうと考えたものだ。

「人は誰しも自分を認めてほしくて、1人にされるのは辛い。けれど声をかけられれば、認められていると感じます。ケアする側の心や態度に対して、ケアされる人は非常に敏感に感じ取られる」。嘉之さんは、そう実感している。

圭子さんも言う。「言葉によって、傷つくこともあれば、言葉によって救われることもあり腹が立つ気持ちを抑えられることもある。そのことは、認知症の方や高齢の方だけでなく、職員さんと同じようにいえる」

青祥会に就職を希望する人たちや就職した人たちは、この基本理念に惹かれる。

畑下嘉之さん、畑下圭子さんは、声を揃える。

「人と人との繋がりによって進んでいくこと。それは、制度が変わっても、技術の進歩があっても、いつの時代も無くしてはならないものだと思います」